

愛さずにいられない反逆児

ゴールドシップ

伝説

小川隆行
ウマフリ

こんな!
GI6勝馬
見たことない

常識はずれの個性派が駆け抜けた
歓声と悲鳴に包まれた夢の航路を振り返る

ゴールドシップ伝説

愛さずにいられない反逆児

小川隆行 + ウマフリ

星海社

261



SEIKAISHA
SHINSHO

プロローグ
愛さずにいられない

「人生では負けられないが、遊びでなら負けられる

そして負けを知ったものだけが味わえる風景というものがある」

そう書いたのは、寺山修司だった。1973年の日本中央競馬会のテレビCMのために書かれた「遊びについての断章」という詩の一節である。

サラブレッドを、競馬をこよなく愛した寺山が、[※]敗れることで味わえる風景があると詠ったことは実に味わい深い。より速く走るために進化と改良を繰り返してきたサラブレッドの世界において、敗北とは、すなわち淘汰と同義であるからだ。

人は、敗れることを怖れる。

敗れることは惨めで、哀れで、残念で、情けないものだ。そして何より、誰にも見向きもされない。敗けてしまったらもう誰にも愛されないという怖れを人は根源的に抱える。

しかし、私たちの心を捉えて離さない名馬たちの足跡はその怖れと矛盾している。

寺山が語るCMが流れた73年。競馬を社会現象にまで昇華させたのが、ハイセイコーだっ

た。大井から現れた怪物はしかし、必勝を期したはずの日本ダービーで3着に敗れた。菊花賞でも、タケホープに苦汁をなめさせられ、有馬記念でも他馬の後塵を拝した。しかしそれらの「敗け」がハイセイコーの価値を貶めたかといえ、決してそうではない。

あるいは昭和の終わりに笠松からやってきた、オグリキャップ。日本中に第二次競馬ブームを巻き起こしたこの芦毛の怪物もまた、ずっと勝ち続けていたわけではない。むしろ積み重ねた勝利と同じくらいに、何度も何度もその戦績に刻まれた敗戦が人々の心を惹きつけてやまなかった。同じ芦毛の古馬タマモクロスに連勝を止められた88年秋の天皇賞。前が壁になりながらも、鬼気迫る脚でスパークリークを追い詰めた89年の天皇賞（秋）。連闘から世界レコードで駆け抜けても、クビ差届かなかった同年のジャパンC。秋6走目、まるで精魂尽き果てたように沈んだ、その年の有馬記念。

「敗け」があつたがゆえに、誰もがハイセイコーやオグリキャップから目を逸らせなかった。全力でターフを疾駆する姿に、人は感動に震え、時に地団駄を踏み、時に快哉を叫び、そして、魂を揺さぶられた。競馬史を彩る名馬の足跡には、「敗け」が色濃く刻まれている。

ゴールドシップもまた、その系譜に連なる。

日本競馬史にその名を刻む、GI6勝を含む重賞11勝の偉業。勝つときは、途轍もなく強い勝ち方を披露した。最後方をマイペースで追走し、常識はずれの位置からの超ロングスパ

ートで大まくり。内で脚を溜めていたはずの他馬を直線でさらに引き離す。そうかと思えば時には涼しい顔をして、好位抜け出しの優等生の競馬もしてのける。その破天荒な走り、無尽蔵とも思えるスタミナ、雄大な芦毛の馬体は、観る者を魅了してやまなかった。

しかし積み重ねたその13の勝利と同じくらいに、15の敗戦についても語りたくなるのがゴールドシップだった。まるで気が乗らないような凡走、あるいは致命的な出遅れ。ほんの僅かでも歯車が狂うと不可解な敗け方をする脆さと繊細さを、ゴールドシップはその内面に秘めていた。それは単なるクセ馬や個性派という枠組みを超えるものだった。

特に古馬になってからは、ゴールドシップが走るたびに、そのレースを観る者は問いを突き付けられた。今日はゲートを出るのか、出ないのか。走るのか、走らないのか。来るのか、来ないのか。信じるのか、信じないのか。

愛するのか、愛せないのか。

その答えを、いつも求められた。なぜ、こんなにもゴールドシップから目を逸らせないのか。なぜ、こんなにも愛さずにはいられないのか。ゴールドシップの雄大な走りに魅せられた分だけ、その問いの答えに窮し、苦惱は色濃くなる。

「人生では敗けられないが、遊びでなら敗けられる」

そう寺山は書いた。しかし何かに敗れても、人生は終わらない。人は敗けを嫌うけれども、

さりとして敗けたとしても人の生は続いていく。寺山が語ったところの「敗け」とはそうした一般的な意味での「敗け」と少し違った情景であるように思う。そしてそれはゴールドシップに魅せられた人なればこそ、味わえる風景なのではないか。

「ゴールドシップよ、何があるうとも、わたしはあなたを信じている」

そう言い切ることができたら、どんなにか楽で幸せなことか。それは心底惚れた相手に「わたしはあなたを愛している」と何の銜いもなく伝えられたらという心理と相似である。

そこに抵抗を感じるからこそ、人は信じられない理由を、愛せない理由を、勝手に自分でつくりだす。そしてその理由と自らの愛との狭間で、人は身動きが取れず、どこにも行けなくなる。ゴールドシップが見せてくれるのはそうした私たちの内面の葛藤だ。

寺山が書いた「敗け」。

それはこの葛藤の末に、自分自身を信じられなくなることを指していたのではないか。己が信じたゴールドシップが撃沈しようとも、信じなかったゴールドシップが激走しようとも、いずれも「敗け」ではない。だからこそ寺山は「遊びでなら敗けられる」と書いた。本当の「敗け」とは、目に映る結果によって己の愛を疑い、それを曲げてしまうことである。

翻って考えるに、ハイセイコーもオグリキャップも、そしてゴールドシップもまた、その意味では「敗け」なかった。どれだけ手痛い敗戦を喫しようとも、艱難辛苦があろうとも、

最後まで諦めなかった。何よりも、ゴールドシップを支えた人々が諦めなかった。4年続けてGIを勝つという偉業はそうした陣営の信頼とともにあった。

ゴールドシップのルーツとなった牝馬に惚れた、小林英一オーナー。下総御料牧場から連なる牝系を守り続けた出口牧場。その才を信じ切った須貝尚介調教師、暴れる調教に乗り続けた北村浩平調教師、慈愛をもって接し続けた今浪隆利厩務員。内田博幸騎手をはじめ騎乗した7人の名手たち。

ゴールドシップに関わるすべての人が、信じ続けた。

そして、ゴールドシップの内包する血が諦めさせなかったのかもしれない。何度も何度もひたむきに挑み続け、現役最後の50戦目に多くの人に歓喜をもたらした、父ステイゴールド。怪我、大番狂わせ、降着といった幾多の困難が訪れようと、何度でも立ち上がった母の父メジロマックイーン。それらの血が、ゴールドシップを「負け」させなかった。

本書はそんな名馬であるゴールドシップについて語り尽くしたい。

もしあなたがゴールドシップに、何がしかの逃れ難い引力を感じるのであれば――

あなたもまた、ゴールドシップとその周りの人たちと同じように寺山が書いた意味での「負け」の風景を知っているのかもしれない。それはきつとあなたもずっと誰かを信じ続けてきたことの、まぎれもない証でもある。

(大寄直人)

目次

プロローグ 愛さずにいられない 3

第二部 **ゴールドシップかく戦えり** 12

〔世紀の大一番〕

皐月賞 2012年 14
宝塚記念 2014年 20
天皇賞・春 2015年 26

〔新馬戦・オープン戦&重賞〕

2歳新馬戦 2011年 34
コスモス賞 2011年 36
共同通信杯 2012年 38
神戸新聞杯 2012年 42

菊花賞 2012年 46

有馬記念 2012年 50

阪神大賞典 2013年 54

宝塚記念 2013年 58

阪神大賞典 2014年 62

阪神大賞典 2015年 66

〔伝説の迷勝負〕

宝塚記念 2015年 15着 72

天皇賞・春 2013年 5着 76

天皇賞・春 2014年 7着 80

ゴールドシップ全成績 84

第二部

同時代ライバルと一族の名馬たち

86

オルフェーヴル 88

ジェンテイルドンナ 92

第三部

ゴールドシップを語る

116

フェノメノ 96

ディープブリランテ 98

ハープスター 100

ジャスタウェイ 102

トーセンジョーダン 104

メジロマックイーン 106

ステイゴールド 110

星旗 114

馬体 治郎丸敬之 118

血統 望田潤 123

気性・体質 今浪隆利 128

脚質・走法 福崙弘 132

種牡馬生活 井澤瑞貴 136

第四部 ゴールドシップの記憶 140

- ゴールドシップの子どもたち 142
なぜ東京で勝てなかったのか? 146
ゴールドシップの「隠れ記録」 150
年度代表馬に選ばれなかった「黄金の船」 154
ゴールドシップに翻弄された男 158
穴党予想家が振り返るゴルシのシルシ 162
ゴールドシップに引き継がれた「芦毛伝説」 166
ゴールドシップを人間に例えたら? 170

座談会 ゴールドシップとその時代 174

おわりに 186

執筆者紹介 190

写真／フォトチェスナット、産経新聞社、福嶋弘
本書中の表記は2023年4月現在のものです。

第一部 ゴールドシップかく戦えり



6歳時、3度目の出走となった春の天皇賞。“目隠しゲートイン”でGI6勝目を挙げた。



世紀の 最大の 一番

伝説の幕開けとなった驚異のワープ、
向こう正面からの圧巻のロングスパート、
見るものの度肝を抜いた豪脚を見よ！

リソミロディック

14
フェイムゲーム

皐月賞GI

唯一無二のワープ戦術で一冠目奪取！
オンリーワンホースが誕生した瞬間

時代が21世紀に入った直後、SMAPの「世界に一つだけの花」が大ヒットした。オンリーワンを賞賛するこの曲を聴いて「ナンバーワンよりオンリーワン」を意識した人も少なくない気がした。

この曲の大ヒットから10年後、競馬界にとてつもない「オンリーワンホース」が出現した。ゴールドシップ。「黄金の船」と名付けられたこの馬は、過去のどの名馬も決して真似のできない独特な走法を披露、競馬ファンを魅了した。数々のレース内容は、長らく競馬を見てきたオールドファンの度肝を抜いたと言って過言ではない。

皐月賞の前走・共同通信杯で重賞初勝利を挙げたゴールドシップだったが、本番では4番人気。単勝7・1倍は、28戦した名馬がもつとも低評価だったレースでもある。

1番人気は前走でスプリングSを制したグランデツァ。3走前の札幌2歳Sではゴールドシップの猛追を半馬身差で退けており、重賞2勝は出走馬中トップだった。皐月賞を制し

た父アグネススタキオンの産駒であり、また鞍上のM・デムーロが前走に引き続き騎乗するの
も1番人気の材料だった。

2番人気ワールドエースは4戦3勝。きさらぎ賞と若葉Sを連勝しており、父は三冠馬デ
イープインパクト。「皐月賞馬の産駒として、グランデツアとどちらが上か」とみる人も少
なくなかった。

2頭に次ぐのは共同通信杯、スプリングSとも2着のディープブリランテ。共同通信杯で
はゴールドシップに敗れていたが、直線が短く先行有利の中山コースだけに巻き返しが期待
されていた。

このほか、ラジオNIKKEI杯でグランデツアとゴールドシップを封じたアダムスピ
ークや弥生賞の覇者コスモオゾラなどもおり、正に混戦状態だった。

前日の長雨が止んだことで馬場状態は稍重に回復していたが、9レースの鹿野山特別（1
000万下 芝2000m）の走破時計は2分3秒3もかかっていた。この日の芝レースでは
先行馬が4コーナーで荒れた内目を嫌い外目を回っていた。これは荒れた内目にノメったり、
滑るポイントがあったためだ。馬場も乾いたことで、騎乗する騎手の多くが「伸びのいい外
目のコースを走らせたい」とイメージしていた。

スタートで半馬身ほど遅れたゴールドシップは二の脚もつかず、馬群を追走しながら最後

方につけた。ハナを切ったメイシヨウカドマツが内目を嫌いながら1コーナーを回った直後、ゴールドシップは荒れた馬場を避けて2頭分ほど外を走った。ゆったりとしたペースの中、向正面で2番手につけたゼロスがメイシヨウカドマツを交わし、この2頭は後続に7〜8馬身ほどの差をつける。「行っただ行っただもあろうるか」と感じる中、1000m通過は59秒1。稍重にしては速いペースでレースは進んだ。

先頭のゼロスが3コーナーに差し掛かった直後、最後方にいたゴールドシップはピッチを上げて内から押し上げていった。内ラチ沿いを走るゼロスを見ながら、先行各馬は荒れた馬場を避けて外目を走る。大外を回った1番人気グランデツアと最内を進むゼロスとの間には10頭以上がひしめきあっている。

次の瞬間、ゴールドシップは予測もしない走りを見せた。あえて馬場の悪い内目を走ると、前の14頭を一気に抜き去ったのだ。

勢いがついたゴールドシップは前を行くゼロスを簡単に抜き去ると後続にグングンと差をつける。後方馬群の馬たちが馬場に脚を取られて伸びあぐねる中、ゴールドシップは後続に影さえ踏ませない。「蹄に滑り止めがついているのか?」とさえ感じさせた。

正に「1頭だけ別次元の脚」だった。

レース前、鞍上の内田博幸は「先行できればいい」と考えていたそうである。馬場も緩く、

加えて7枠からの後方一気はさすがにきつい。そんな中、スタートで加速はつかず最後方。イメージと真逆のレースになったが、内田騎手は慌てることなく冷静にレースを進めた。「コース取りは狙ってましたか？」と勝利インタビューで聞かれると「(前が開いた瞬間に)外へ出すよりも、内へ入れたほうがいいと判断しました」と答えた。

ゴールドシップの持久力を把握していたからこそ、「今だ！　ここしかない！」と感じて内を突いたのである。

騎手に限らず、一流と称されるアスリートには「状況に対処する判断力と勇気が必要」と言われるが、それを感じた職人仕事で、この瞬間移動を生み出した。

このようなレース展開を目にしたのは、半世紀近く競馬に接してきた中でもこの皐月賞だけである。後に「ゴルシワープ」と称された走りは正にオンリーワン走法。「類まれなるスタミナ」と「愛馬の長所を把握していた鞍上」とのマッチングから生まれた。

大胆なマクリを武器にGIを6勝したゴールドシップ。先行馬を何度もごぼう抜きしてフアンの度肝を抜いたが、その先駆けとなった皐月賞のレース内容は「競馬史上で唯一無二」と感じている。能力の片鱗を見せつけ、後世まで語り継がれる芸術となった。

すさまじいスタミナを「出せるか否か」。気分良く走った際と、嫌気がさした際の結果の差も、今になるとゴールドシップの魅力だと感じてならない。

(小川隆行)



開いた内を突いてGI初制覇(左から2頭目)。伝説の幕開けとなった皐月賞。

ゴルシ伝説の第1章、観衆の度肝を抜いた「オンリーワン走法」

展開がレースを左右するのはよくあることだが、開いた内を突いた追い込み馬が一瞬のうちに先頭に立つようなレースはなかなかお目にかかれない。直線の短い中山コースにおける「追い込み馬同士のワンツーフイニッシュ」も、87年のサクラスターオー&ゴールドシチー以来だった。

2012年4月15日

第72回 皐月賞 GI

中山 芝右 2000m 3歳オープン 晴 稍重



レース結果

着順	枠番	馬番	馬名	性別	年齢	斤量	騎手	タイム	着差	人気
1	7	14	ゴールドシップ	牡	3	57	内田博幸	02:01.3		4
2	5	9	ワールドエース	牡	3	57	福永祐一	02:01.7	2.1/2	2
3	3	6	ディーブプリランテ	牡	3	57	岩田康誠	02:01.8	3/4	3
4	7	15	コスモオゾラ	牡	3	57	柴田大知	02:01.8	ハナ	6
5	8	18	グランデツァ	牡	3	57	M・テムーロ	02:02.0	1.1/4	1
6	4	8	サトノギャラント	牡	3	57	横山典弘	02:02.0	ハナ	9
7	4	7	パールドインパクト	牡	3	57	藤岡佑介	02:02.1	クビ	13
8	2	4	メイショウカドマツ	牡	3	57	藤岡康太	02:02.1	ハナ	11
9	1	1	モンスター	牡	3	57	柴田善臣	02:02.2	1/2	16
10	5	10	スノードン	牡	3	57	北村友一	02:02.3	3/4	18
11	3	5	アーデント	牡	3	57	藤田伸二	02:02.3	ハナ	8
12	2	3	トリップ	牡	3	57	田辺裕信	02:02.4	クビ	7
13	6	12	フジマサエンペラー	牡	3	57	田中勝春	02:02.5	1/2	17
14	8	17	ロジメジャー	牡	3	57	安藤勝己	02:02.6	3/4	15
15	7	13	シルバーウェイブ	牡	3	57	北村宏司	02:02.6	アタマ	14
16	6	11	マイネルロブスト	牡	3	57	武豊	02:02.7	3/4	10
17	8	16	ゼロス	牡	3	57	川田将雅	02:03.5	5	12
18	1	2	アダムスピーク	牡	3	57	N・ピンナ	02:04.8	8	5

迷伝 勝説 負の

宝塚記念3連覇の夢は露と消えた！
たとえ競馬史に残る「やらかし」をしても、
ゴールドシップなら仕方ないという空気が流れた



菊花賞と有馬記念を制し、4歳初戦の阪神大賞典を楽勝。
2013年春の天皇賞は楽勝ムードだったが…。

宝塚記念 GI 15着

ゴールドシップ、もう一つの代表レース
個性派の真骨頂とも言える世紀の大出遅れ

自分が馬券を外したというエピソードを、面白おかしく語ることはよくあるが、それを楽しそうに言えるレースと出会えることは、そうそう無い。そんなレースがあるとすれば、相手に面白い個人的なエピソードが絡んでいるか、愛情をもって語れる馬が絡んでいるか、だ。多くのの人にとって、そんな「ちよつと笑える」大ハズレとなったのが、あの“宝塚記念だろう。

古馬となったゴールドシップは、春に恒例のローテを歩むのがお決まりだった。阪神大賞典、天皇賞（春）、宝塚記念。その戦績は独特で、4歳時が1着↓5着↓1着、翌年が1着↓7着↓1着。ゴールドシップにそっくりな見た目の母父メジロマックインが二度も制した天皇賞（春）での敗北を、阪神大賞典と宝塚記念の勝利がサンドしていたのである。2レースを連覇する実力があり、菊花賞で見せたスタミナもある。何がゴールドシップの天皇賞（春）制覇を妨げているのか、メディアもファンも要因を探し続けていた。

注目されたのが、ゴールドシップの性格だ。父親譲りの気性面の難しさは、オルフェーヴ

ルなどでもファンを知るところ。実際にゴールドシップも、走る気分ではないが故に負けることのあるタイプに見えた。だからこそ、ファンはゴールドシップの「本気」を引き出せるような、救世主や必勝法が降臨するのを心待ちにしていたと言える。

その期待に応えたのが、5歳シーズンに三度コンビを組んでいた、横山典弘騎手だった。6歳になったゴールドシップは、岩田康誠騎手を背に阪神大賞典を制すると、続く天皇賞(春)で横山典弘騎手とのコンビ復活により念願の勝利を掴み取る。それも、前半は折り合いをつけて後半で長く良い脚を使う「ゴールドシップらしさ」の溢れるレースぶり。勝ち↓負け↓勝ちでサンドしていたこの2年間とは異なる展開に、ファンの期待は高まる一方だった。

——今年のゴールドシップは、違う。

ゴールドシップを愛するファンでなくとも、多くの競馬ファンがそう感じたのではないだろうか。それほど、横山典弘騎手とゴールドシップは「雰囲気のある」コンビだった。ベテランとなった奇才ジョッキーが、ついにゴールドシップの潜在能力を存分に引き出せるコミュニケーション方法を見出したように見えた。しかも、次走は連覇している宝塚記念。このコンビで、得意の条件であれば勝利は堅いのではないだろうか——。ファンはゴールドシップを単勝1・9倍という断然の1番人気に押しあげた。ゴールドシップがGIで単勝1倍台となったのは、2年前の天皇賞(春)以来のことである。それでも、その評価は非常に妥当に思え

た。新生ゴールドシップがどのような勝ち方を見せてくれるかに注目していたファンも多いのではないだろうか。スタート直後までは。

スタートの瞬間の出来事を、今浪隆利厩務員は次のように振り返る。

「ゲートまではおとなしなかったんですけどね……。中に入ってから隣でトーハウジャッカルにバタバタされて、イライラし始めてしまいました。意外と競馬場ではおとなしい馬だったんですが、あの瞬間に調教中のような荒々しさがそこで出てしまつて。立ち上がって噛みつきにいったタイミングでゲートが開いたんですが、横で『ああ、遂にレースでやっちゃったなあ：』と思ひながら見上げていました。自分にとつては見慣れた光景でしたが、ファンの方々には申し訳なかつたですね」

ゴールドシップが見せつけた仁王立ちと、それに伴う大出遅れで散った馬券は、117億円に及ぶという。実況席から鳴り響いた悲鳴も、絶望的っぷりを印象付けた。あの連勝は、一体なんだったのか……。ここで仁王立ちするための伏線だったかのように、ゴールドシップは実にアッサリと単勝1倍台を裏切つたのであった。

一方で、ファンの多くが、芦毛の怪物「らしさ」として、どこことなく嬉しそうに語るのも事実。それこそ、稀代の気分屋として愛されたゴールドシップの真骨頂なのかもしれない。出遅れ15着でむしろファンを増やした、奇跡の馬による奇跡の一戦である。（緒方きしん）

2015年6月28日

第56回 宝塚記念 GI

阪神 芝右 2200m 3歳以上オープン 晴 良



圧倒的1番人気ながら大出遅れ→15着大敗…。また一つ、ゴルシ伝説が増えた。

レース結果

着順	枠	番	馬名	性別	年齢	斤量	騎手	タイム	着差	人気
1	8	16	ラブリーデイ	牡	5	58	川田将雅	02:14.4		6
2	3	6	デニムアンドルビー	牝	5	56	浜中俊	02:14.4	クビ	10
3	1	1	ショウナンパンドラ	牝	4	56	池添謙一	02:14.6	1.1/4	11
15	8	15	ゴールドシップ	牡	6	58	横山典弘	02:15.6		1

第二部 同時代ライバルと一族の名馬たち

同時代にししのぎを削った実力筆頭の貴婦人から
黒のライバル、凱旋門賞を一緒に走った盟友、
史上最強ステイヤーにつながる血脈まで





日本ダービーはメンバー中トップタイの上がり33秒8で追い込むも5着（一番左）。
デビュー後初めて馬券圏外に…。



オルフェーヴル

ゴールドシップと同じ父、母父、
強さと危うさを併せ持つ史上7頭目の三冠馬

観る者の心を震わせ、眠っていた情熱に火を灯す。

オルフェーヴルは、そんな走りを見せてくれる優駿だった。しかし、真夏の強い陽射しには、それだけ影が色濃く映るように、その輝きとともに見せる影もまた強いものだった。

2011年、震災禍に沈む世情のなかで成し遂げた、史上7頭目となるクラシック三冠は、多くの人々に希望の光を灯した。さらに、ファンの夢を乗せて走るグランプリを、3歳から3年続けての勝利。そして遠きフランスはロンシャンの最高峰、凱旋門賞にも挑戦し、2年続けての2着という偉業を成し遂げた。

積み重ねられたその偉大な戦績もさることながら、時に見せる危うさと脆さゆえに、オルフェーヴルの走りからは誰もが目を離せなかった。勝つときは途方もないエネルギーで末脚を爆発させるが、それは危ういまでの激情と背中合わせだった。

デビュー戦を勝利した入線後から、鞍上の池添謙一騎手を振り落とす。3走目の京王杯2

歳Sでは、道中引つ掛かつて2ケタ着順に沈んだ。しかし、その抑えきれないほどの激情は、陣営の尽力により爆発的な末脚へとその形を変えていく。

震災の影響により23年ぶりの東京開催となった皐月賞では、一瞬のうちに突き抜けた。日本ダービーでは、不良馬場のなか後方からこじ開けるように差し切つての二冠達成。そして菊花賞では、4コーナーで先頭に並びかけると、直線は後続を離すばかり。三冠を達成した入線後にも、池添騎手を振り落とす姿は、デビュー戦から変わらないオルフェーヴルの本質的な姿のようにも見えた。

その激情は、時にオルフェーヴル自身をも焦がし尽くすものだった。古馬初戦の阪神大賞典での、競馬史に残る逸走。その次走の天皇賞（春）では、後方でしっかりと折り合つていたはずが、直線では気の抜けたように伸びず大敗してしまふ。三冠を達成するほどの圧倒的な強さとともに、時に危うさや脆さを見せるのがオルフェーヴルだった。

しかし、光が影をつくり、影が光とともにあるのだとすれば、オルフェーヴルの強さと危うさもまた、根源的には同じものだったのかもしれない。それはどこか、1年遅れて生を享けたゴールドシップと似ていた。

父ステイゴールド、母父メジロマックイーンという同じ血を持つ、オルフェーヴルとゴールドシップ。前向きすぎる激情と、抜身の日本刀のごとき切れ味の末脚のオルフェーヴル。

気分屋で、無尽蔵のスタミナでのロングスパートを得意としたゴールドシップ。気性も脚質も全く違うのだが、強さと危うさが同居することについては、本質的に似ていた。

13年の有馬記念は、その2頭が同じ舞台で走った、最初で最後のレースになった。

ゴールドシップは、鞍上のR・ムーア騎手がスタートから気合をつけながら中団後方を追走。これがラストランとなるオルフェーヴルは、その後ろに控えた。二度目の凱旋門賞から帰国して、その手綱は池添騎手に戻っていた。緩みのないペースで流れたレースは、3コーナーで沸点を迎える。徐々に進出しようとするゴールドシップを、さらにその外から馬なりでまくっていくオルフェーヴル。

4コーナーで早くも先頭に立ったオルフェーヴルは、無人の荒野を往くがごとく、直線を突き抜けた。2着のウインバリアシオンにつけた着差は、実に8馬身。おおよそGIとは思えない独走劇。大歓声が上がるスタンドとは裏腹に、オルフェーヴルはどこか静けさの中にあるように見えた。それは、自らを焼き焦がすような危ういまでの激情を、観る者の心に情熱の火を灯す光に昇華させたからだったのだろうか。

その姿は、直線で3着まで追い込んできたゴールドシップにも重なるように見えた。

オルフェーヴルは、ゴールドシップとその本質において似通った部分のある名馬だった。

そしてきつと、その本質を、人は愛するのだ。

(大寄直人)

オルフェーヴル

生年月日 2008年5月14日

獲得賞金 13億4408万円(中央)

血統 (父)ステイゴールド

通算成績 21戦12勝[12-6-1-2]

(母)オリエンタルアート

主な勝鞍 皐月賞 日本ダービー 菊花賞

(母父)メジロマックイーン

有馬記念(2勝) 宝塚記念

調教師 池江泰寿(栗東)

全成績

年月日	競馬場	レース名	距離	人気	着順	騎手	タイム	馬体重	勝ち馬(2着馬)
2010/8/14	新潟	2歳新馬	芝1600重	2	1	池添謙一	01:37.4	448	(ショウナンパルフェ)
2010/10/3	中山	芙蓉S (OP)	芝1600良	1	2	池添謙一	01:35.3	450	ホエールキャブチャ
2010/11/13	東京	京王杯2歳S (GI)	芝1400良	1	10	池添謙一	01:22.6	454	グランプリボス
2011/1/9	京都	シンザン記念 (GIII)	芝1600良	3	2	池添謙一	01:34.2	456	レッドティヴィス
2011/2/6	京都	きさらぎ賞 (GIII)	芝1800良	2	3	池添謙一	01:47.8	450	トーセンラー
2011/3/26	阪神	スプリングS (GII)	芝1800良	1	1	池添謙一	01:46.4	444	(ベルシャザール)
2011/4/24	東京	皐月賞 (GI)	芝2000良	4	1	池添謙一	02:00.6	440	(サダムパテック)
2011/5/29	東京	日本ダービー (GI)	芝2400不	1	1	池添謙一	02:30.5	444	(ウインバリアシオン)
2011/9/25	阪神	神戸新聞杯 (GI)	芝2400良	1	1	池添謙一	02:28.3	460	(ウインバリアシオン)
2011/10/23	京都	菊花賞 (GI)	芝3000良	1	1	池添謙一	03:02.8	466	(ウインバリアシオン)
2011/12/25	中山	有馬記念 (GI)	芝2500良	1	1	池添謙一	02:36.0	462	(エイシンフラッシュ)
2012/3/18	阪神	阪神大賞典 (GII)	芝3000稍	1	2	池添謙一	03:11.9	462	ギュースターヴクライ
2012/4/29	京都	天皇賞(春) (GI)	芝3200良	1	11	池添謙一	03:15.6	460	ヒートブラック
2012/6/24	阪神	宝塚記念 (GI)	芝2200良	1	1	池添謙一	02:10.9	456	(ルーラーシップ)
2012/9/16	フランス	フォワ賞 (GII)	芝2400稍	1	1	C・スミヨン	02:34.3	計不	(Meandre)
2012/10/7	フランス	凱旋門賞 (GI)	芝2400重	2	2	C・スミヨン	計不	計不	Solemia
2012/11/25	東京	ジャパンC (GI)	芝2400良	1	2	池添謙一	02:23.1	458	ジェンティルドンナ
2013/3/31	阪神	産経大阪杯 (GII)	芝2000良	1	1	池添謙一	01:59.0	464	(ショウナンマイティ)
2013/9/15	フランス	フォワ賞 (GII)	芝2400重	1	1	C・スミヨン	02:41.5	計不	(Very Nice Name)
2013/10/6	フランス	凱旋門賞 (GI)	芝2400重	1	2	C・スミヨン	計不	計不	Treve
2013/12/22	中山	有馬記念 (GI)	芝2500良	1	1	池添謙一	02:32.3	466	(ウインバリアシオン)



ジエンティルドナナ

対戦成績は2勝2敗と五分
ゴルシ最大のライバル牝馬

オルフェーヴルが三冠を達成した翌年、2012年のクラシック6戦（秋華賞を含む）を勝った馬はわずか3頭。これは20年の2頭（コントレイルとデアリングタクト）に次ぐ少なさである。牡馬戦線がゴールドシップとディープリランテの2頭で、牝馬戦線は史上4頭目の三冠馬となったジエンティルドナナの1強状態だった。

デビュー5戦目の桜花賞を勝ったジエンティルドナナだったが、オークスでは過去5戦すべてがマイル戦で距離に不安、加えて初の長距離輸送。鞍上の岩田康誠騎手が騎乗停止処分を受け川田将雅騎手に乗り替わるなど危険な要素も多かったが、終わってみれば2着ヴィルシーナに5馬身差の圧勝劇。勝ち時計2分23秒6はレースレコードを1秒7も更新した。

秋初戦のローズSでは好位2番手から後方馬を寄せ付けず、続く秋華賞で三冠を達成。父ディープリンパクトとの「親子三冠達成」は史上初の快挙だった。

続くジャパンCでは先輩三冠馬オルフェーヴルと史上2例目（1例目はミスターシービーと

シンボリルドルフ)の三冠馬対決が実現した。凱旋門賞で僅差の2着に惜敗したオルフェヴルが1番人気でジェンティルドンナは3番人気。ほかにも凱旋門賞を勝ったソレミアや前走の天皇賞(秋)でGⅡ勝目を挙げたエイシンフラッシュなどGⅠ馬9頭という豪華メンバーの中、ラチ沿いの馬場の走りやすさを確認した岩田騎手は内にこだわるコース取りを行い、直線では狭い箇所をこじあけるべく先輩三冠馬に馬体をぶつけてハナ差先着。牝馬とは思えぬ闘争的な勝利が評価され年度代表馬に選出された。

4歳初戦のドバイシーマクラシックを2着後、宝塚記念でゴールドシップと初対決。2頭とも単勝2倍台＝一騎打ちの様相を呈した。

ジェンティルドンナはスタートを決めて先行。一方、前走の天皇賞で出遅れ5着に敗れたゴールドシップもジェンティルドンナをマークするように4番手につける。ジェンティルドンナは父ディーブに似たスムーズな走り、かたやゴールドシップは歩幅の小さいピッチで追走。コアなファンの中には、両馬の走りはまるで違うと見えただろう。3コーナーを過ぎるとゴールドシップは早くも押し上げ、対するジェンティルドンナは手綱を持ったままラチ沿いを走っている。ここまでの展開をみる限りジェンティルドンナが有利と感じたが、ゴールドシップのロングスパートは衰えず、名牝は3着に敗れてしまった。

しかし、ジェンティルドンナは雪辱を果たす。秋初戦の天皇賞を2着すると、続くジャパ

ンCでゴールドシップと二度目の対戦を迎えた。前半1000m62秒4というスローペースを3番手で進んだジェンティルドンナが突き抜け、レース史上初の連覇を果たした。ゴール前は団子状態で、各馬の着差をみるとハナヤクビなど僅差状態。そんな中、ゴールドシップは前と3馬身半差、ジェンティルドンナから遅れること1秒4差の15着と大敗した。

5歳初戦の京都記念は6着に終わり、3歳チューリップ賞(4着)以来10戦ぶりの馬券圏外。続くドバイシーマクラシックでGI6勝目をマークするも、宝塚記念ではまたもゴールドシップに敗れた。秋は天皇賞2着、3連覇を目指したジャパンCは4着。「名牝もここまでか」との空気も漂う中、管理する石坂正師は「ジャパンCは中途半端だった」と有馬記念に向かった。中山コース初出走に加え、不調ムードもあつて4番人気だったが、ゴールドシップより4馬身ほど前の3番手を走ると、直線で追い上げてきたライバルより鋭い末脚をみせてGI7勝目をマーク。総獲得賞金17億円はティエムオペラオーに次ぐ史上2位(現在はアーモンドアイ1位、キタサンブラック2位、ジェンティルドンナ5位、ゴールドシップ9位)となり、ライバルとの対戦成績を2勝2敗としてターフに別れを告げた。

母になると3番仔のジェラルディーナが22年のエリザベス女王杯を勝ち、アパパネ&アカイトリノムスメに次ぐ三冠牝馬2例目の母娘GI勝利を達成。同馬がゴールドシップ産駒と戦うのを密かな楽しみとしている。

(小川隆行)

ジェンティルドンナ

生年月日 2009年2月20日

獲得賞金 13億2621万円(中央)

血統 (父)ディーピンパクト

通算成績 19戦10勝[10-4-1-4]

(母)ドナブリーニ

主な勝鞍 桜花賞 オークス 秋華賞

(母父) Bertolini

ジャパンC(2勝) ドバイシーマC

調教師 石坂正(栗東)

有馬記念

全成績

年月日	競馬場	レース名	距離	人気	着順	騎手	タイム	馬体重	勝ち馬(2着馬)
2011/11/19	京都	2歳新馬	芝1600不	1	2	M・デムーロ	01:41.0	474	エーシンフルマーク
2011/12/10	阪神	2歳未勝利	芝1600良	1	1	I・メンディザバル	01:36.7	470	(ヤマニンカヴァリエ)
2012/1/8	京都	シンザン記念(GIII)	芝1600良	2	1	C・ルメール	01:34.3	466	(マイネルアトラクト)
2012/3/3	阪神	チューリップ賞(GIII)	芝1600良	2	4	岩田康誠	01:36.1	460	ハナズゴール
2012/4/8	阪神	桜花賞(GI)	芝1600良	2	1	岩田康誠	01:34.6	456	(ヴィルシーナ)
2012/5/20	東京	オークス(GI)	芝2400良	3	1	川田将雅	02:23.6	460	(ヴィルシーナ)
2012/9/16	阪神	ローズS(GII)	芝1800良	1	1	岩田康誠	01:46.8	472	(ヴィルシーナ)
2012/10/14	京都	秋華賞(GI)	芝2000良	1	1	岩田康誠	02:00.4	474	(ヴィルシーナ)
2012/11/25	東京	ジャパンC(GI)	芝2400良	3	1	岩田康誠	02:23.1	460	(オルフェーヴル)
2013/3/30	UAE	ドバイシーマC(GI)	芝2410良	1	2	岩田康誠	-	計不	(St Nicholas Abbey)
2013/6/23	阪神	宝塚記念(GI)	芝2200良	1	3	岩田康誠	02:13.8	470	ゴールドシップ
2013/10/27	東京	天皇賞(秋)(GI)	芝2000良	1	2	岩田康誠	01:58.2	470	ジャスタウェイ
2013/11/24	東京	ジャパンC(GI)	芝2400良	1	1	R・ムーア	02:26.1	470	(デニムアンドルビー)
2014/2/16	京都	京都記念(GII)	芝2200稍	1	6	福永祐一	02:16.5	478	デスベラード
2014/3/29	UAE	ドバイシーマC(GI)	芝2410良	2	1	R・ムーア	02:27.2	計不	(Cirrus des Aigles)
2014/6/29	阪神	宝塚記念(GI)	芝2200良	3	9	川田将雅	02:15.1	468	ゴールドシップ
2014/11/2	東京	天皇賞(秋)(GI)	芝2000良	2	2	戸崎圭太	01:59.8	470	スピルバーク
2014/11/30	東京	ジャパンC(GI)	芝2400良	1	4	R・ムーア	02:24.0	472	エピファネイア
2014/12/28	中山	有馬記念(GI)	芝2500良	4	1	戸崎圭太	02:35.3	470	(トゥザワールド)

フェノメノ

両雄並び立たずを感じさせた！
名ステイヤーとして大活躍した同期生

ステイゴールドファンには「ゴールドシップのライバルは？」と聞かれて、フェノメノと答える人も多いのではないだろうか。同じ父を持つGI馬にもかかわらず「両雄並び立たず」という不思議な関係のライバルとして、ファンの記憶に深く刻まれた。

青葉賞を完勝したフェノメノは、2012年ダービーで皐月賞馬ゴールドシップとの初対決を迎える。人気の上ではゴールドシップ2番人気、フェノメノ5番人気だったが、蓋をあけてみれば、勝ち馬ディープリランテに最も迫ったのはフェノメノの方だった。ゴールドシップ5着に対し、フェノメノは2着と、大舞台で目立つ走りを見せつけた。

秋にはセントライト記念を制し、天皇賞(秋)でもエイシンフラッシュと0.1秒差の2着と、GI級の能力を見せたフェノメノ。ゴールドシップとの二度目の対決は翌13年、天皇賞(春)だった。ゴールドシップは既にGI3勝馬であり、前哨戦・阪神大賞典の完勝ぶりからも1.3倍という断然の1番人気に推される。しかしレースが始まると、ゴールドシップ

は定位置の後方からのマクリで4角4番手まで押し上げつつも、直線で力尽き5着。一方のフェノーメノは好位追走から、直線入口で先頭に立ち、そのまま押し切る横綱相撲で見事GI初制覇を遂げた。3度目の対決は次走の宝塚記念。ここでは負けられないとばかりに意地を見せたゴールドシップが完勝し、フェノーメノは4着に敗れる。この頃から、「ゴールドシップとフェノーメノは一緒に馬券圏内に来ない」と、ファンの間で話題になり始めた。

翌14年、両雄は再び天皇賞（春）で相まみえる。阪神大賞典を連覇し、万全の状態で迎えたゴールドシップを、またもフェノーメノが返り討ちにし、天皇賞（春）2連覇の偉業を達成。最後の対決となった同年の有馬記念では、ゴールドシップが先着した。これで12年ダービー（フェノーメノ2着、ゴールドシップ5着）、13年天皇賞（春）（フェノーメノ1着、ゴールドシップ5着）、13年宝塚記念（フェノーメノ4着、ゴールドシップ1着）、14年天皇賞（春）（フェノーメノ1着、ゴールドシップ7着）、14年有馬記念（フェノーメノ10着、ゴールドシップ3着）と、最終的な2頭の対戦成績はフェノーメノの3勝2敗となり、ついに同時に馬券圏内に来ることはなかった。

フェノーメノは翌15年、史上初の天皇賞（春）3連覇を目指したものの、直前に故障が発覚し無念の引退となってしまふ。そして主役を失ったこの一戦を、ライバルのゴールドシップが制する。2頭のドラマは劇的なエンディングを迎えたのだった。

（金川夢路）

父 ステイゴールド
母 ディラローシェ
母の父 デインヒル

鞍 牒 [7-2-0-9] 天皇賞・春（2勝）
距離適性 中長距離
脚 質 先行

第三部 ゴールドシップを語る

今浪さんが聞いたバズーカのような心音とは？
当時をよく知る関係者や競馬研究家たちが
想像を超えたパフォーマンスの秘密を探る



馬体

血統

気性・体質

脚質・走法

種牡馬生活



3歳秋初戦の神戸新聞杯。2着以下を突き離し菊花賞へ名乗りを挙げた。

馬体

メジロマックイーンを強く感じさせる馬体

随所に感じられる芦毛以外の共通点

「ROUNDERS」編集長 治郎丸敬之

ゴールドシップの馬体を見ると、まず目に付くのは馬格の雄大さと筋肉量の豊富さである。芦毛だからよりふっくらと映るのだが、それにしても柔らかい筋肉が全身を覆っている。鼻づらがピンク色に染まっているのは、おそらく皮膚も薄くて柔らかいのだろう。馬体全体のフレームが大きく、筋肉量が多いため、当然のことながら馬体重も重い。しかし、長い距離を走る上では、馬体重の重さは時としてマイナス材料になりうる。体重が重いとその分、エネルギーの消費量も多く、スタミナ切れを起こしてしまうからだ。だからこそ、真のステイヤーに大型馬は少ない。ところが、ゴールドシップはデビュー時から502キロの馬体を有し、現役終盤に天皇賞（春）を制したときは510キロもあつた。大きな体を揺らしながら、3200mを駆け抜けたのである。

ゴールドシップの馬体の秘密は、母父メジロマックイーンにある。ゴールドシップの馬体とはメジロマックイーンのものなのである。ゴールドシップの馬体にはメジロマックイーン

の影響が強く出ているということだ。芦毛だからということではない。2頭を並べて見れば分かる。メジロマックイーンの馬格の大きさと頑強さ、そしてふつくらとした柔らかい筋肉の豊富さを、ゴールドシップはそのまま受け継いでいるのである。あえて違いを見つけるとすれば、ゴールドシップの方がやや首が太くて、頭が大きいぐらい。

振り返ってみると、メジロマックイーンは当時のステイヤールとしては馬格の大きい馬であった。宿敵ライスシャワーは440キロ前後の馬体であり、同門の逃げ馬メジロパーマーも460キロ前後、ステイヤールとして名を馳せたミスターアダムスは470キロ前後という中、メジロマックイーンは492キロの馬体重でデビューし、3年後に産経大阪杯をブツ切ったときは500キロを超えていた。長距離戦では大きすぎる馬体がマイナスになることもあるが、メジロマックイーンは一度もそのような素振りを一切見せることなく、無尽蔵のスタミナを誇示し続けたまま引退した。

メジロマックイーンの血は父系としては途絶えようとしているが、母系に入ってその影響力を示し続けるだろう。なぜかという点、メジロマックイーンの血は馬体をポリウムアップすることができるからである。たとえば、ゴールドシップの祖母パストラリズムは2勝馬でありながらも、牝馬としてもやや小さい450キロ台の馬体であった。メジロマックイーンを配合したことで、母ポイントフラッグは500キロを遥かに超える馬体で、チューリッ

ブ賞を2着したのち牝馬クラシック戦線に駒を進めた素質馬となった。メジロマックイーンによって一気に50キロ以上もポリウムアップしたのである。

あのオルフェーヴルにも同じことが当てはまる。祖母エレクトロアートは400キロそこそこの小さな牝馬であったが、メジロマックイーンのおかげで母オリエンタルアートはある程度の馬体の大きさになり、産駒が小さく出てしまいがちなステイゴールドを配合してもなんとか牝馬としてはギリギリのサイズ感のオルフェーヴルが生まれた。メジロマックイーンがいたから、日本競馬史上最強の1頭であるオルフェーヴルが誕生したと言っても過言ではない。ステイゴールド×母父メジロマックイーンが黄金配合と言われるのは、ステイゴールドの小ささをメジロマックイーンが母系から補ったというのが本質である。馬体と血統はつながっているのだ。

繰り返しになるが、ゴールドシップの雄大な馬格や尽きることのないスタミナ、道悪を苦にしないパワー、もちろん毛色も、全ては母を経由してメジロマックイーンから受け継いだものである。ただし、気性の激しさと難しさはステイゴールドからそのまま伝わったようだ。体はメジロマックイーン、心はステイゴールドというのがゴールドシップの正体である。

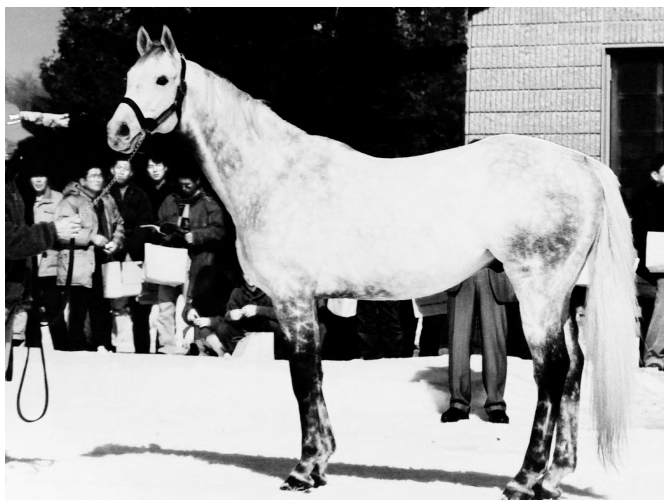
ということが分かれば、ゴールドシップの謎は次々と解き明かされていくだろう。ダートは苦手だったのか？ については、メジロマックイーンはダートで2勝を挙げており、ゴ

ルドシップも同様に全く苦にしなかったはず。むしろダートの鬼だった可能性すらある。ただ気性がステイゴールド譲りであれば砂を被るのを嫌がったはずで、肉体的には走れるけど精神的には走らなかつたかもしれない。同じ血統構成のオルフェーヴル産駒たちがダートで活躍しているように、ゴールドシップ産駒からもゆくゆくはダートの大物が誕生するのではないかと私は期待している。また、短距離戦を走つたらどうだったのか？ については、武豊騎手が「メジロマックイーンは短距離でも通用するスピードがあった」と語っていたので、マイル戦ぐらいであれば通用しただろう。ただし出遅れや立ち遅れがなければの話だ。

最後に、ゴールドシップの種牡馬としての未来を考えてみたい。ゴールドシップは1頭当たりの獲得賞金額が牡馬と牝馬で逆転している珍しい種牡馬である（牡馬834万円、牝馬1193万円）。牡馬よりも牝馬の方が走るということだ。私の知る限りにおいては、獲得賞金額が牡馬と牝馬で逆転しているのは、現役種牡馬ではゴールドシップとミッキアーイルのみ。なぜ牝馬の方が走るかというと、馬体が大きく出るから。メジロマックイーンの血が馬体をふくらませるため、牡馬は重くなりすぎるのに対し、小さく出がちな牝馬はちょうど良いサイズになるというカラクリである。そして、牝馬が走るフィリーサイアーの産駒は繁殖牝馬になって良い仔を出すのは定石である。ゴールドシップもメジロマックイーン同様に、牝系を通して日本競馬の未来に大きな影響を与えつつけることになるだろう。



ゴールドシップ



メジロマックイーン

賢く偏屈なタイプのゴールドシップ 忘れられない、爆発するような心音

JRA 厩務員 今浪隆利

ゴールドシップとの出会いは、検疫の厩舎でした。当初から「あ、すごい良い馬だな」という感触がありました。身体つきからしてバランスの良さが目立っていて、僕が今まで担当した馬では一番良いかもしれないと思っていました。有名になってからのイメージとは違い、あの頃はおとなしいタイプでした。たまにやんちゃはするけど、それほど酷いものではなかったです。「オープンまでは十分行けるだろうなあ」と期待していました。デビューが近づいて調教する度に成長していくので、内心、舌を巻いていました。

新馬戦、コスモス賞の連勝はそれなりに想定通りでしたが、重賞の壁を越えられるかどうかはまた話が変わってくるので、少し身構えていました。ただ、二度目の重賞挑戦となったラジオNIKKEI杯の走りを見て「この馬はすぐに重賞を勝てそうだな」と確信しました。レースごと、調教ごとに目覚ましい成長を遂げていく一方で、少しずつこの馬に怖さを感じるようになっていったのも事実です。新馬の頃は僕が乗り運動をさせられていましたが、

3歳になる頃にはゴールドシップ自身から発される威圧感とオーラの凄まじさに圧倒されるようになり、自分で「もう、この馬には乗らない方が良いかな」と判断しました。同時に気性面のこだわりも強くなっていき、自分で嫌だと思ったら歩いていかずにバックするなど自己主張に振り回されることも多くなりました。

ただ、そうしたこだわりの強さは、ゴールドシップの賢さの裏返しでもあります。日常生活でも、ゴールドシップが他の馬と比べて相当に賢いと感じるシーンは多々ありました。例えば食事一つでもそうです。ゴールドシップはデビュー前から引退するまで、必ず同じ食事の摂り方をしていました。それは、与える食事の量を増やしても減らしても、必ず一口分だけ残すというもの。食欲は旺盛なタイプなのに、絶対に完食せずにほんの少し残す…。理由はわかりませんが、そうしたこだわりが長期間にわたって続くことも含めて、本当に頭が良い馬なんだなあと感じさせられました。

一緒にいて相性の良さを感じたのは、ジャスタウエイです。若い頃に一度だけジャスタウエイが後ろに来たせいで立ち上がって吠えたことがあるのですが、それ以降は気に入ったように、並ばせると落ち着いておとなしく歩いてくれました。凱旋門賞への挑戦で渡仏した際も一緒だったことで落ち着いて移動できましたし、困るほどのやんちゃもせずについてくれました。いわば盟友でしたね。

ただ、いつでもジャスタウェイがそばにいてくれるわけではありません。共同通信杯を勝利したあたりからは馬が成長してパワーが凄いいことになっていたので、二人掛かりでも手に負えなくなっていました。そして周りの馬を気にして、気に入らない馬が近づくと襲うようになったため、ゴールドシップの現役中は調教で「すみません！ この馬に近づかないでください！」と大声で謝ってばかりでした。ただ、一緒にゴールドシップを担当していた北村浩平調教助手は「とにかくこの馬が強くなるっていうのはわかっているんだから、放馬をさせずに、しっかりとコントロールしていこう」と意気込んでいましたし、私たちのモチベーションは高かったです。乗り役を振り落として暴走するようなことがあると怪我をしてしまうので、そうしたトラブルを起こさないことが私たちの第一目標でした。だからずっとつきつきりで、手綱を放さないように必死でしたね。

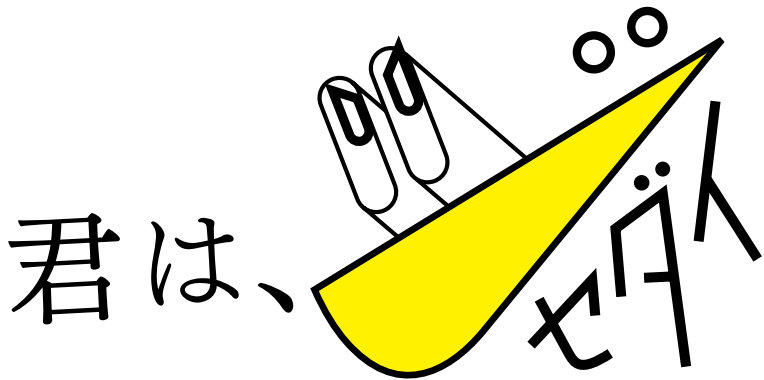
強さを感じたのは、菊花賞。調教段階から、皐月賞よりもパワーがついていると感じていましたし、雰囲気も良かったです。それでも長距離戦であるタイミグで仕掛けられてああいう競馬をするとは、想像を超えるパフォーマンスでした。そのスタミナを支えていたのは心臓の強さでしょう。以前、獣医師の方とゴールドシップの心音を聞いたことがあります。他の馬は想像通りの心音なのですが、ゴールドシップだけはドーンドーンというバズーカのような音を響かせていました。獣医師の方も「他の獣医に聞かせてやりたい」と仰っていた

ほどです。また、身体の柔らかさも抜群でした。立ち上がったたり暴れたりしても、バネと柔軟性があるおかげで怪我をしないでいられたのでしよう。腰回りやトモの丸みが、現役後半になってもずっと良い状態を維持していたのも印象に残っています。

気性面が荒いタイプというよりは賢く偏屈なタイプだったので、競馬を終えて戻ってきた時には大人しく寄ってきて甘えてきたりと、可愛い一面も持っている馬でした。現役を引退する時は非常に寂しかったですが、「このままゴールドシップの現役がずっと続くと僕の身体はどうなってしまうんだろう：」という考えも浮かんでいましたし、ゴールドシップの産駒を早く見てみたいという夢を持ち始めていたので、前向きに送り出すことができました。

ゴールドシップが引退して種牡馬となつてからも、僕が牧場に会いに行くと、毎回必ず嬉しそうに近づいてきてくれます。牧場でのんびり過ごしているからか、現役の頃よりも落ち着いて少しおとなしくなっている気がします。引退した馬というのは世話をしていた人間を多少は覚えていても時が経つと忘れてしまうものですが、ゴールドシップはずっと覚えてくれているので、改めて賢さを痛感するとともに、愛おしさを覚えずにはいられないです。僕自身は厩務員として23年の9月に引退を迎えますが、引退してからはゴールドシップ産駒や今担当している馬の子らが良い成績を残してくれることを楽しみにしていこうと思います。

(構成・緒方きしん)



何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!